

## 一次的事ばの対話性

ことばは対話である

一次的事ば ↓ 身体をもつ生身の人間どうしのあいだに交わされる対話

二次的事ば ↓ 一人の人間が演壇に立って一方的にしゃべるとか、作家がひとり書齋で文字を連ねていくとかいう営み

ことばの生成の過程においてあくまで二次的なものとして登場したにすぎない。

いやこの二次的なことばも、**それ自体のうちに本来的な一次的事ばの対話性を内在させている。**

それゆえにこそ、一本の線になぞらえて概念化されることばも、身体をもってこれを聞き、これを読む人間の世界では、いつも対話へと立ち上がろうとする。

★言語学や国語学のなかでは案外これが見落とされてきた。

## ことばの立体視

○平面に立体を見る。それは人間がほとんど生得的にもっている自然な知覚体制である。

これとまったく同じことがことばにも成り立つ。

ことばが文字によって紙の上に書きつけられたときにも、人は、この紙という平面に刻まれたことばから、そのことばが交わされたはずの（あるいはそのことばが交わされるはずの）**生活空間の全体を一つの立体として読み取る。**

読者の側であえて読み取るうとせずとも、ことばは自分のほうから立ち上がってくる。

ことばを語り、綴った人のパースペクティブのうえに、これを聞き、読む人のパースペクティブが重なったとき、はじめてそこにことばの平面が立体に立ち上がる。それは写真を見るときとまったく同じである。

## パースペクティブの置換

生身で生きているこの生活世界が原理的に自分のパースペクティブから逃れようがないのに対して、

**ことばの世界は生身の生活世界からパースペクティブを移して、自在にあらたな世界の構成ができる**

志賀直哉の『小僧の神様』

文章の作り手は、ことばによってこのように自在にパースペクティブの置換を行い、また読み手はそのパースペクティブの置換をごく自然に追って読み取る。

★それ以前のところで私たちは、生身の身体で生きているこの生活世界において、周囲の他者、その他者たちのあいだのやりとり、しじゅう自分の視点を重ね、その他者のパースペクティブを生きようとしている。

**だからこそことばの世界においても、それと同型のパースペクティブの置換が成り立つ**

※ことばの世界についてこの第一章で確認してきたことのひとつひとつが、じつはみな身体の世界につながる。そのつながりの目を探るのが本書の課題である。